郷土のとびら

季刊

直方市立図書館 NOGATA CITY LIBRARY

2022年4月発行　第26号

中世の直方　粥田庄

荘園とは貴族や豪族、有力な寺社が所有している、幕府の権力が及ばない私有地のことです。直方地域では、植木以外の地域が粥田庄に含まれており、後に感田地域が感田庄として分離しました。粥田庄は保元元（1156）年豪族粥田経遠が所有していた嘉麻・穂波・鞍手三郡の土地を京都の延勝寺に寄進したのが始まりとされています。その後鳥羽上皇に寄進し、実質的に支配しました。しかし粥田経遠が平家の御家人だったため、鎌倉時代になると粥田庄は没収され、源頼朝の妻の政子の所領となります。貞応３（1224）年政子は高野山金剛三昧院及び多宝塔領として寄進し、その後は高野山の支配となります。その地域は現在の旧宮田町本城・龍徳・鶴田・生見・脇野、小竹町勝野・御徳、頴田町口ノ春・鹿毛馬、鞍手町八尋、直方市新入・上境・下境・畑・永満寺・中泉が含まれました。境郷（上境・下境あたり）には年貢徴収のため高野山の庄屋敷が置かれ、役僧が行き来していました。高野山の支配は50年間ほど続き、その後鎌倉の北条氏に戻され、元寇の軍事費に宛てられ、戦国時代になると消滅してしまいます。旧香井田町（宮若市）や飯塚市頴田という地名は、粥田庄の名残と言われています。

直方歴史ものがたり　N219ノ
直方市史　上　NL219ノ
筑前国粥田壮史料　NL219チ

筑豊の民話 -岩見重太郎-

豪傑岩見重太郎は名島城主小早川隆景の家臣で、武者修行をしながら諸国を巡っていました。慶長４年、たまたま境郷の西（小竹町赤地あたり）の中野の里に泊まっていました。中野の里では災禍が絶えず、それを免れるため人身御供を習わしとしていました。宿で 18 歳のつゆという娘が明日、人身御供に差し出されることを聞いた岩見重太郎は。娘の身代わりを申し出ました。その夜岩見重太郎は短刀を持ち、女装して白木の箱に入って待っていました。村の若者がその箱を妙見社に運んだところ、丑三つ時の頃、100 年以上生きているような大ヒヒが現れ、襲いかかってきたので、重太郎は持っていた刀で突きさしました。

重太郎が村に戻り出来事を語ると、村人はとても喜びました。翌日血の跡をたどっていくと、東の方半里ほどのところにある洞穴につづいていて、傷を負った大ヒヒが倒れていました。そこで大ヒヒを打ち殺し、その時からそこが「野猿谷（やいんだに）」と呼ばれるようになりました。

中野の里の妙見社は、現在小竹町赤地の太祖神社として信仰を集めています。

「筑豊弁で語る筑豊の民話」占部暢勇/著　梓書房　N388チ

女子教育の先駆者

大和クニ

明治 34 年１１月、東京の戸板裁縫女学校(現在の戸板女子短期大学)に筑前国から１人の女性が訪れ、入学したいと申し出ました。彼女は大和クニ、当時３４歳でした。学ぶのは若い女性ばかりの学校側としては、３４歳というクニの年齢に多少のためらいを見せましたが、はるばる九州から女一人で上京した熱意にうたれて入学を許すことにします。入学したクニは、「何を教えても飲み込みが早い、技術がしっかりしている」というのですぐに教師たちの注目の的となり、その後わずか半年で修業証書が出され正式に教員として採用されました。

明治 40 年、クニは戸板裁縫女学校の教師を辞し、故郷に帰ってきます。その年の８月、直方の東町に大和裁縫女学校を開講、東京帰りの先生ということで初年度から 40 人近い生徒が集いました。大正 3 年には祝町に校舎を新築移転し、教育内容も単なる裁縫だけではなく、手芸、作法、数学、珠算、茶道と幅広いものになりました。大正４年、クニは大和幼稚園を設立、当時としては珍しい洋風の建物でした。昭和 23 年、学制改革により大和裁縫女学校は大和高等専攻学校と改称され、その 5 年後に学校法人大和学園を設立、大和高等専攻学校の総てを寄付しました。昭和３３年、91 歳のクニは、永年に亘り女子教育に功労があったとして藍綬褒章を受けます。女手一つの学校経営は順風の日ばかりではなく、自らは独身を通し、ただひたすらに子女の成長を願った献身の日々でした。

『唐衣　よき妻となれ母となれ　世に裁ち縫いの　道を究めん』

１万人を超える子女を育てたクニが何時も口にした和歌です。なお、クニが開いた学校は直方女子高校から平成 14 年に大和青藍高等学校へと改称、男女共学制となり今も発展しています。

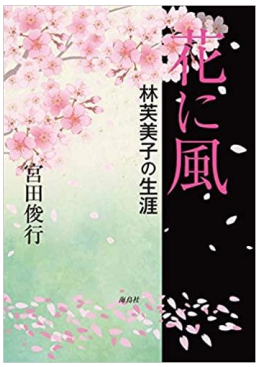
「ふるさと直方人物誌」N281 ノ

はじめの一歩　～郷土資料の紹介～

直方市立図書館にある郷土関係の本を紹介していきます。
郷土の歴史や文化に興味をもっていただくきっかけになればと思っています。

『花に風　林芙美子の生涯』

宮田俊行／著　　Ｎ910 ノ



林家のルーツ、出生地を巡る混乱と彼女にとっての古里の意味、「花のいのち」の詩の変遷など、これまでに解明されていない謎を解き、驚くべき量と質の作品を生み出した作家の潔い生き方に迫った１冊。

『生きてゐる幸福(しあわせ)はあなたも知ってゐる　私も知ってゐる
花のいのちはみじかくて　苦しきことのみ多かれど　風も吹くなり
雲も光るなり』

「花のいのち」を改作し、赤毛のアンの翻訳者で友人の村岡花子に贈られたこの詩からは、生きることの喜びや幸せ、人間への肯定に溢れた林芙美子像が浮かび上がってきます。

直方市立図書館　　直方市山部 301-11 ユメニティのおがた内
TEL 0949-25-2240　　FAX 0949-23-3902